

# SONIC REALITY 『Ocean Way Drums』

取材・構成／編集部  
翻訳／ベーター加藤

世界有数のスタジオ、オーシャン・ウェイ・レコーディングで収録されたドラム・ライブラリー『Ocean Way Drums』がSONIC REALITYより発売された。録音と監修を務めたのは同スタジオのオーナー、アラン・サイズ氏とエンジニアのステイブン・ミラー氏。2人にその制作過程について話を聞いた。

## 最高のスタジオで収録された 最高のドラム・サウンド

オーシャン・ウェイ・レコーディングは、ビル・パトナム氏が設立したユナイテッド・ウェスタンを前身とする老舗スタジオ。同スタジオのオーナーであるアラン・サイズ氏はクインシー・ジョーンズなどの作品を手掛けたエンジニアとしてもその名が知られており、2回のグラミー賞に輝いた経歴の持ち主。一方、ステイブン・ミラー氏はスザンヌ・ベガなどを手掛けたベテランのプロデューサー／エンジニアだ。そんな2人が手掛けた『Ocean Way Drums』は高品質なKontakt 2フォーマット用ドラム・ライブラリー。24ビット／96kHz収録のPlatinumと24ビット／48kHz収録のGoldがラインナップされており、前者は80GB、後者でも40GBの膨大な容量を誇る。多彩な楽器が用いられているのはもちろん、各パートは複数のマイクで収録されている点が特長で、楽器とマイキングのバリエーションを含めサンプル数は何と65,000！これらは19のドラム・キットにまとめられており、Kontakt Playerをベースにした付属ソフト上ですぐに音源として活用できる。もちろん、ユーザーが任意に楽器をチョイスしてオリジナルのキットも作成可能だ。さらに、パートごとにマイク間のレベル調整、パン、エンベロープ、ベロシティなどを自在に調整して音作りが可能。パート間のバランスを取るた

めのミキサーも付属ソフトに用意されている。

この驚異的なライブラリーの制作工程について2人にE-Mailでの取材を試みたところ、連名による回答が編集部へ届いた。まず、既に多くのドラム・ライブラリーがリリースされている中、なぜこのプロジェクトを始めたのかその動機を尋ねてみたところ、2人はこう答えてくれた。

「エンジニアそしてプロデューサーとして、私たちは市場に出回っているサンプル・ライブラリーのほぼすべてを耳にしてきました。優れた製品があることも事実ですが、奥行き、雰囲気、色調、全体としての表現力など、私たち2人がドラム・サウンドに求める要素をすべて満たしたものは一つも見当たりませんでした。そこでショッキングなほどリアルな、最高水準のドラム・ライブラリーを作ろうと考えたわけです」

しかも、本ライブラリーは製品化まで約2年もの月日がかかれたというから、そのこだわりの強さが感じられる。

「最初にドラムやシンバルのモデル選定から始めました。また収録はすべての楽器がそろった状態で行ったかったので、その手配にも着手したのですが、録りたい楽器のメーカーや製造された年代があまりにも多岐に渡るため、これだけでもかなり大変な作業となりましたね」

実は、あらかじめ用意された19のドラム・キットにはメーカー名やモデル名の表記がなく、単に1から19まで数字で表されている。それには理

由があるようだ。

「楽器を集めたあと、自分たちが求めるドラム・サウンドを得るため、私たちはそれらの中から必要なものを選んで独自のカスタム・キットを組みました。どのドラムとシンバルをどう組み合わせればどんなサウンドが得られるかについては、長年のレコード作りの経験からよく分かっています。個々のドラムやシンバルのメーカーの違い、作られた時代の違いなどにかかわらず、出自の異なる打楽器を集めて自在に1つにまとめていったのです。キット名を数字で表記したのはそうした理由からです」

## ドラマチックなサウンドのために 多彩なマイクを駆使

レコーディングは、オーシャン・ウェイ・レコーディングの中でも“サウンドの殿堂”と呼ばれるスタジオBで数週間かけて行われたとのこと。フランク・シナトラやレイ・チャールズ、ナット・キング・コールなどの名盤が録音された場所であり、近年ではカニエ・ウェスト、エリック・クラプトン、レディオヘッド、ポール・マッカートニーなども使用している。

「スタジオBはミニチュアのコンサート・ホールといった雰囲気でもどんな楽器でも美しく心地よいサウンドに仕上がります。特にドラムは、ほとんど奇跡的と言ってもいいほどの」

ドラム・キットはライブ・ルームのコーナーに設



◀オーシャン・ウェイ・レコーディングのオーナーであり、エンジニアのアラン・サイズ氏。2回のグラミー受賞経験を持つ大ベテランだ



▶エンジニア／プロデューサーのステイブン・ミラー



◀『Ocean Way Drums』。24ビット／96kHzフォーマットのPlatinum (281,400円)と24ビット／48kHzのGold (138,000円)の2バージョンを用意

▶Kontakt Playerをベースとした『Ocean Way Drums』の付属ソフト



置いて収録されたという。これはキックやタム、スネアのローエンドを、ルーム・マイクで最大限拾うための措置だったそうだ。ここで気になるのは、やはりマイク選定だろう。何しろ、オーシャン・ウェイ・レコーディングは世界有数のマイク・コレクションでも知られているスタジオなのだ。

「マイクに関しては事実上無限の選択をすることができたと自負しています。マイク・セレクトでは、サウンドの明瞭さと描写力、可能な限り大きなサウンド・フィールドが得られることを念頭に置き、可能な限り印象深く、ドラマチックなサウンドを狙ったマイク・セッティングを試みました」

それでは具体的なマイキングについて説明していただく。

「キックは、ウィンド・スクリーンをセットした NEUMANN U47 FET と AKG D112 もしくは D12 を近い位置に、U47 を遠めにセットしました。また、スネアには約45cm 上方に AKG C12A のペア、場合によってはそれらと同時にダイナミック・マイクの SHURE 545 をヘッドから約4cm のところにセットして使用しました。スネアのボトムには SONY C-55P というとてもレアなマイクのペアを用いています。これはピシッと鞭打つような素晴らしいサウンドが録れるマイクです」

スネアの C12A をペアで用いたマイキングはドラム・ライブラリーの収録であるからこそ実現可能な特殊なセッティングだという。

「通常のレコーディングでは、スネアのステレオ・マイキングはかなり難しいと思います。今回の手法は現実のスネアよりラージなサウンド・イメージを録るためのライブラリー用レコーディングだからこそうまくいったのです。単一指向性は近接効果が極端であるため、近くにセットし過ぎるとローエンドが過剰になります。ゆえにスネアから5cm 程度のところにセットしてもいいサウンドは得られないものの、45cm 程度のところにステレオでセットすると、極めて印象的でない音が拾えるようになる場合があるのです」



▲本作で使用されたコンソールはスタジオBに設置されている、ビル・パットナムの手によるカスタム・メイド・コンソール。カスタムのチャンネルEQに加え、API 550Aを挿入することでチャンネルごとに最大で6バンド（選択可能な周波数は計30ポイント）の調整が可能になっているという

また、オーバー・ヘッドにはAKG C12を2本、ルーム・マイクには3セットを使用したそうだ。

「1つ目はNEUMANN M50のペアで、2つ目は無指向性のU47のペア、3つ目は無指向性のU67、KM54、TELEFUNKEN ELA-M251のうちのいずれかを選んで使いました」

### ビル・パットナムの手による 世界唯一のカスタム・コンソール

録音にも用いられたコンソールは、ビル・パットナムによる完全なカスタム・モデルで、もちろんスタジオBにしかない世界で唯一のものだ。

「このコンソールはマイク入力からバス出力までのシグナル・パスにはカスタム・メイドのディスクリット型アンプが3つしか配置されていません。また、インプット・トランスはビルが設計したレシオ1:1のもの。チャンネルEQはパッシブ型でゲインはモジュール型ライン・アンプで調整する仕様です。つまり、EQを挿入しても追加アンプの必要がないわけです。また、すべての入力系にディスクリット型のAPI 550Aをインサートすることも可能となっています。実際の収録にあたっては、最良の結果を得るために必要と感じたEQ処理を施しています。使用したのはカスタムEQや550A、あるいはNEVE 1073のいずれかで、ほかは一切使用していません。なお、インパクトとパンチ力を最大限高めるために、コンプレッサーは一切使いませんでした」

レコーディング後、彼らは収録したサウンドにさらなる加工を施したという。

「ライブラリーに収録されたサンプルは、第1世代のオリジナル・サンプルそのままではありません。Kontakt Playerで再生できるサンプルにするには、それなりに手を加える必要があるからです。私たちはこれまでの経験からデジタル・コピーにもオーディオ・クオリティを劣化させる幾つかの問題、例えば位相偏移などがあることを知っていました。こうした問題を回避する方法を



▲各ドラム・キットはローエンドをルーム・マイクで最大限に拾うためスタジオBの後方右側に設置された。ルーム・マイクには距離とモデルの違いによる3セットを設置。NEUMANN M50のペア（写真右側の手前）、TELEFUNKEN ELA-M251（写真両端）、NEUMANN U47のペアが確認できる

見出すまでには数カ月もの長い時間をかけなければなりませんでした」

さらに、2人は『Ocean Way Drums』のもう1つの特徴はプリセットだという。これは各キットに6種、各パート単体には12種ずつ用意されている。キット用プリセットは各パートのレベル・バランスとキット全体のアンビエンス量を調整したもので、パート用プリセットはそのパートに対するアンビエンスと使用マイクのバランス、ベロシティなどを設定したものだ。著名なエンジニアがレコーディングし、ミックスしたドラム・サウンドをユーザーがそのまま使えるというわけだ。

「これらのプリセットを作るにあたっては、私たちの音楽センスならびにレコーディング経験が主な指針になったことに間違いはありません。音楽とは本能的、感覚的なものであり、フィールが最も重視されるものです。私たちはまずそうしたフィールを再現することを念頭に置きました。そして、実際に目指したフィールのドラム・サウンドになっているかどうかを確認するために、手元にある既存曲のマルチを用意してそこからドラム・トラックを除き、プリセット・サウンドを使ったドラム・トラックに差し替えてみたのです。こうして作成したプリセットを使えば、ユーザーの方々はお好みのドラム・キットを即座に使用できます。また、異なるドラム・キットを次々と呼び出すことも手軽にできるので、いろんなドラム・サウンドを自在に試すことも可能です。こうしたことを実現した製品はこれまでありませんでした」

### S

数々の名盤が制作されたスタジオで、一流のエンジニアが録り、ミックスを施したドラム・サウンドをそのまま使用できる上に、ユーザーが自由に操ることもできるという『Ocean Way Drums』。2人の強いこだわりがなければ実現できなかったかもしれない、ユーザーにとっては夢のような本ライブラリーのハイ・クオリティ・サウンドをぜひ体験してほしい。



▲ドラム・キットの後方から見たマイク・セッティング。スネアにSHURE 545とAKG C12Aがステレオで設置されていることに注目。こういったマイキングは通常のレコーディングでは難しく、ライブラリーの収録だからこそ実現できたマイキングだという